

《サン・チャイルド》設置について

今回、福島市子どもの夢を育む施設「こむこむ館」の前に《サン・チャイルド》という巨大な子ども像を設置させていただいた、ヤノベケンジと申します。

私の作品が一部の方々に不愉快な思いをさせてしまったことについて、大変申し訳なく思っています。改めて作品と設置に至る経緯をご説明させていただきたいと思います。少し耳を傾けていただければありがたいです。

《サン・チャイルド》は2011年の震災を受けて制作しました。2010年に福島県立美術館での展覧会に参加させていただいたことをきっかけに多くの福島の方々とかかわりを持ちました。ご縁のあった方々と震災直後から連絡を取り合い、特別展示や夏休みの子どものためのワークショップなど、早い段階からさまざまなお手伝いをさせていただく機会にも恵まれました。東日本全域を襲った災害、特に原子力発電所の事故には、大きく胸を痛めてきました。

私は、1991年の美浜原発事故をきっかけに「放射能」をモチーフにした作品の制作をはじめ、1997年には原発事故後のチェルノブイリに、ガイガー＝ミュラー計数管を付けた自作のスーツを着て訪問しました。その際、立入禁止区域で意図せず自主的避難者の方々に会う機会がありました。そして、仰々しい恰好のスーツによって、住民の方々を傷つけてしまうことがありました。その後、原子力を人間が扱うことの難しさを警鐘する作品を作り続けることで、チェルノブイリでの過ちを償おうとしてきました。

日本で原発事故が起きたとき、長年、「放射能」をモチーフにした作品を作り続けてきた私は、ご縁もあった福島の方々に対してどのような行動をすべきか悩みました。今度は創作によって、人々を勇気づけるような作品を作りたいと思いました。

そして、どんな困難にも負けず、凛々しく逞しく立ち上がる子ども像を制作することで、2011年当時、社会に漂っていた暗雲を振り払えるように願いを込めました。しっかり空を見上げるまなざしに明るい未来の希望が映るように、と。

また、大気が奇麗になったことを表すようにヘルメットを脱いで深く息をし、胸のカウンターは安全を示すゼロになっています。もちろん、自然放射線があるので、空間線量がゼロになることはありませんが、「原子力災害がない世界」という象徴的な意味を込めました。そして、右手の小さな太陽は、新たなエネルギーや未来の希望を表しています。

また、衣装は「防護服」のようではありますが、巨大な問題に立ち向かう甲冑であり、宇宙服のような未来的なイメージも込めていました。

それでも、今まで簡単には受け入れられないナーバスな作品であると率直な意見をいただくこともありました。また、作品解説の際、「防護服」や「ガイガー・カウンター」と簡略化して説明してしまったことも誤解を受けてしまった点だと反省しています。「放射能」に対する知識の正確さが、震災前と比較にならないくらい求められていることに配慮すべきでした。

《サン・チャイルド》は、大阪の万博記念公園で2011年10月に初めて展示した後、生誕100年を迎える岡本太郎記念館や、翌年には東京の第五福竜丸展示館の敷地内にも展示しました。その間にもう1体作り、イスラエルやロシア、愛知、岡山など各地で展示してきました。3体目は私の故郷、大阪府茨木市の南茨木駅前広場に、東を向いて2012年より恒久設置されました。

今回寄贈させていただいた1体目の《サン・チャイルド》は、2012年の福島現代美術ビエンナーレで福島空港の出発ロビーでも展示されました。福島の主催者から出品依頼があったとき、ヘルメットを脱いでいるとはいえ、「防護服」のようなものを着ている子ども像は、福島に住む方々から受け入れられるのは難しいだろうと、私は思い、懸念を示しました。しかし、今だから立ち上がる大きな彫刻を持ってきて欲しいと頼まれ、資金不足の事務局の代わりに、クラウドファンディングで全国から延べ208名の協力により運搬費を集め、展示が実現いたしました。その際、福島の方々からたくさんのご支援をいただき、会期も延長されて展示されたことを大変ありがたく思っています。

その後、継続的に福島ビエンナーレへ出品したり、風評被害と懸命に闘っておられる地元農家や酒造メーカーとコラボレーションしたりすることで、福島の地域の人々が求める声を聴かせていただきながら、手助けになるよう、創作者として関わりを続けてきました。毎年のように、大阪から福島まで足を運び、創作が何かの力になればと行動してきましたが、同時に自分のできることは限られていることを痛感していました。

2014年、そんな中で出会ったのが福島の佐藤彌右衛門さんでした。福島で再生可能エネルギーによる電力会社を立ち上げ、福島から自主自立のエネルギー生み出し状況を変えたい熱い思いをお持ちでした。そこで私は、自分にできることで協力をしたいと申し出ました。佐藤さんが困難に立ち向かい実践される姿が、自分の中で《サン・チャイルド》に重なりました。

福島市内の地域発電会社ビルにあるギャラリー・オフグリットで、展覧会をさせていただいた際に、《サン・チャイルド》の1/10模型を請われたことをきっかけに、もしお役に立てるのならという思いから、1体目の作品も寄贈することにいたしました。

制作から7年が経ち、世界中の多くの方に見ていただいていたこと、毎年のように福島に通っていたこと、2011年とは違う活気を取り戻した街の雰囲気、作品を歓迎しようとしてくれる人々との出会いが、皆様に喜んでもらえるのではないかという、思い上がりになっていたのかもしれない。

どこに設置するかは、寄贈先のふくしま自然エネルギー基金にお任せしていましたが、この度、木幡浩福島市長が岡山県副知事時代に《サン・チャイルド》などの作品を見ていただいていたご縁もあり、今回、ふくしま未来研究会を経て、福島市に寄贈させていただくことになりました。

木幡市長は飯館村ご出身で実家の御家族は避難を余儀なくされました。復興庁の福島復興局長にもなられており、原子力災害に向き合い克服して、世界に経験がない原子力災害か

らの復興を福島から成し遂げて行きたいという強い想いに感じ入り、是非協力したいと思いました。批判されるかもしれないと思ってはいましたが、お二人に少しでも協力できればという想いでした。

実は、《サン・シスター》という、《サン・チャイルド》よりも少し未来の再生を遂げた世界の少女像を制作し、2014年、喜多方市で開催された福島現代美術ビエンナーレで展示しています。《サン・シスター》は、座りながら希望ある未来を思い描いて冥想し、立ち上がるとともに、眼を開けて手を広げ、希望の世界の到来を告げます。

2015年には《サン・シスター》の恒久設置バージョンを、阪神淡路大震災20年に合わせて、兵庫県立美術館前に設置しました。元の《サン・シスター》は、増田セバスチャン氏の協力を得て、衣装を変えて《フローラ》という花の女神にして、2016年、二本松市で開催された重陽の芸術祭でも展示いたしました。福島市の方々に《フローラ》についてもご覧いただく機会を持ち、希望のメッセージを感じていただければと願っております。

今回、市長からのご厚意を受け、《サン・チャイルド》を設置させていただきましたが、突然、設置されて驚かれた方、不快に思われた方がいましたら改めてお詫び申し上げます。もとより市民の皆様を傷付ける意図は全くありませんので心を痛めております。

しかるべき時に、直接、市民の方々にお会いしてご意見をお聞きし、お話しする機会を持つために、お伺いしたいと思っています。その中で皆様のご理解が得られたら嬉しいですが、今後の取扱いは福島市や関係者と話し合っていきたいと思っております。

私としては、今後心情をより深く理解し、創作することで、何らかの貢献ができればと願っております。

2018年8月10日

ヤノベケンジ

※複数の方から文中の自主的避難者は、自主的帰省者、の間違いではないかとお指摘を受けました。チェルノブイリの立入禁止区域には、事故を起こした4号機以外は、事故後も稼働していたので、日常的にたくさんの労働者が働いていました。私が意図せず出会ったのは、サマシヨールと言われる自発的帰郷者です。お詫びして訂正いたします。

8月12日 追記